令和六年度　弘学館入学試験

中学校　国語問題

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

いまの時代、そう頑張って暗記しなくても、ネットで検索すれば、必要な情報はすぐ手に入る。中国の歴代王朝も、漢文や経典のテキストも、哲学の古典も、検索すれば、直ちに閲覧できる。わざわざ図書館に行く必要はないし、本屋を探し回る必要もない。情報がすぐ手に入るのであれば、それはいわば暗記しているのと同じではないか。理解を伴わない暗記は、情報をただ脳のなかに貯めこんでいるだけだ。脳のなかでなくても、すぐ取り出せるなら、ネットやパソコンのなかでもよいのではないか。①こういった意見もよく耳にする。

X、いまのネットaゼンセイの時代になって、暗記の価値は下がった。このことは認めざるをえないだろう。文字が発明されて、情報が文書として記録できるようになると、暗記の価値は大きく下がったが、ネットですぐ検索できるようになると、暗記の価値は Y 下がったと言わざるをえない。Z、それでも、暗記にはまだまだ重要な価値が残されている。ネット検索ですぐ情報が手に入るといっても、暗記した情報を思い出すのに比べれば、かなり時間がかかる。瞬時に思い出せる心地よさに比べて、ネット検索はまどろっこしい。余計なbコウコクが表示されるから、なおさらだ。

しかも、ネット検索では、理解に至る助けにならない。情報がネットやパソコンにあるだけでは、たとえそれがすぐ引き出せるとしても、情報はただそのまま蓄えられているだけで、何の変容も生じない。しかし、暗記していれば、理解していなくても、情報は無意識のうちにいわば「整理」されていく。具体的にどのようなことが起こっているかはまだよくわからないが、暗記した情報のあいだに何らかのつながりが生まれてくる。たとえば、同じ言葉が異なる情報に含まれていれば、それによってその異なる情報のあいだにつながりができてくる。このように情報が「整理」されると、それがのちの理解の助けになるのである。

かりに脳を直接、ネットに接続できるようになれば、キーボードをcソウサしたりすることなく、瞬時に検索できるようになろう。中国の歴代王朝は何だったかと思っただけで、歴代王朝が頭に浮かぶ。それは暗記した歴代王朝を思い出すのと何ら変わらない。脳科学と人工知能研究では、キーボードを介さずに脳とコンピュータを直接つなぐ研究がじっさいに進められている。これをＢＭＩ（ブレイン・マシン・インターフェース）とよぶ。この研究が進展すれば、いずれ暗記したことを思い出すのと同じような仕方で、コンピュータのメモリに蓄えられた情報をすぐ取り出せるようになるだろう。

しかし、そうなっても、コンピュータのなかの情報はただ蓄えられているだけで、②暗記した情報のように、時とともに「整理」されはしない。「整理」されるためには、情報を蓄えたチップを脳内に埋めこまなければならないだろう。そうすれば、チップ内の情報どうしや、チップ内の情報と脳内の情報とのあいだに何らかのつながりが生まれてくるだろう。そうなれば、チップ内の情報は「整理」され、暗記した情報と同じように、理解に至る助けとなろう。

ただし、脳内に情報チップを埋めこむことには、※1倫理的な懸念がある。膨大な情報をいわば暗記できるからといって、健常者に情報チップを埋めこんでもよいのだろうか。それは脳（それゆえ心）に取り返しのつかない損傷を与えることになるかもしれない。dシンコクな記憶障害のある患者にたいしてなら、ひとつの治療法として情報チップを埋めこむことも許されるかもしれないが、③健常者にそのような危険なことを行うのはいかがなものであろうか。

このような倫理的懸念はあるものの、情報チップの研究は進められており、いずれ倫理的な懸念も克服されて、脳に情報チップを埋めこむ時代がやってくるかもしれない。そうなれば、ようやく私たちは暗記の苦役から解放されることになろう。④『ドラえもん』に「アンキパン」が出てくるが、これはノートや本のページに食パンを押しつけて、その内容を写しとり、それを食べると、書かれた内容を暗記できるという便利な小道具だ。この小道具のように、情報チップを脳に埋めこめば、その情報を覚えられるという夢のような時代がやってくるかもしれない。もっとも、暗記が趣味の人にとっては、暗記の価値がほとんどなくなって、いささか寂しい時代になるかもしれないが。

このような夢の時代がやってくるのは、まだもっと先のことである。技術の進歩がeイチジルしい昨今にあっては、何百年も先のことではないかもしれないが、少なくとも数十年は先であろう。それまでは、やはり暗記をせざるをえない。電卓が普及するまえは、筆算やそろばんで計算をせざるをえなかったが、それと同じように、情報チップの埋めこみが可能になるまでは、暗記は不可欠であろう。暗記の苦役は続くが、暗記の喜びを見つけることも可能だ。円周率の小数展開を何万ケタまで覚えている人がいるが、膨大な数の並びを一挙に脳裏に思い浮かべることができるのは、さぞ爽快なことであろう。※2嬉々として暗記できるようになれば、それは人生の潤いのひとつとなる。

（信原幸弘『「覚える」と「わかる」』による）

注　※1　倫理的な懸念――道徳的な基準がおびやかされることへの心配。

※2　嬉々として――「喜々として」と同じ。

問1　波線部a～eのカタカナを漢字に直しなさい。ただし、楷書で大きくていねいに書くこと。

問2　本文中の［X］～［Z］に当てはまる言葉として最も適当なものを、次のア～カのうちからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　いきなり　　イ　さらに　　ウ　しかし　　エ　たしかに　　オ　たとえば　　カ　だから

問3　傍線部①「こういった意見もよく耳にする」とあるが、「こういった意見」の内容の説明として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　今の時代、パソコンやネット検索にはさまざまな問題があるので、十分な理解を心がけながら情報を暗記することが大切だ。

イ　必要な情報を探す時に、パソコンやネット検索の方が便利な場合と暗記の方が良い場合とがあるので、うまく使い分けるべきだ。

ウ　情報を脳のなかに貯めこんでいるだけならばネットやパソコンと同じなので、情報の暗記に多くの労力を注がなくてもよい。

エ　ネットやパソコンで欲しい情報を検索をする方が、暗記しておくよりも正確で最新の情報が取り出せるので、暗記に意味はない。

問4　傍線部②「暗記した情報のように、時とともに『整理』されはしない。『整理』されるためには、情報を蓄えたチップを脳内に埋めこまなければならないだろう」とあるが、「暗記」と脳に埋め込む「チップ」は、どのような点で共通しているのか。四十字以内で説明しなさい。

問5　傍線部③「健常者にそのような危険なことを行うのはいかがなものであろうか」とあるが、なぜ「危険」だと言うのか。五十字以内で説明しなさい。

問6　傍線部④「『ドラえもん』に「アンキパン」が出てくる」とあるが、『ドラえもん』の「アンキパン」の例は、本文でどのような働きをしているのか。その説明として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　技術の進歩によって暗記することの大変さから人々が解放されて楽になる時代がいずれやって来るだろうということを、読者が想像しやすくなっている。

イ　技術の進歩によって生活は便利になる一方で、古き良き時代の記憶が失われていくという事態が起こりうるということを、読者が想像しやすくなっている。

ウ　技術の進歩によって倫理的な問題が解消するというのは夢物語で、実は危険な情報が広がりやすくなるということを、読者が想像しやすくなっている。

エ　技術の進歩によって人間と情報の関係が変わり暗記も不要になるという状況を受け入れられない人も出るということを、読者が想像しやすくなっている。

問7　次の対話文は、本文を読んだ生徒たちによるものである。［Ⅰ］・［Ⅱ］に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、後のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

Aさん――今、人工知能がどんどん進化しているけれど、そんな時代に、暗記がどのような意味を持つのかということについて考えさせられる文章だったね。

Bさん――本文の筆者は、暗記についてどう思っているのだろう。「暗記の苦役」と言っているから、筆者も暗記することからとにかく逃れたいと思っているのかな。

Cさん――Bさんの意見も興味深いけれど、［Ⅰ］というのが筆者の基本的な考えのような気がするな。

Aさん――うん、そうだね。本文の「［Ⅱ］」という言葉が、Cさんの意見の根拠となるね。

Bさん――なるほど。二人ともしっかりと文章を読めているなあ。

ア　Ⅰ　暗記の価値は近い将来なくなっていくので、暗記にこだわりすぎると時代に乗り遅れてしまう
　　Ⅱ　寂しい時代

イ　Ⅰ　暗記の重要性は今までと変わりはするが、暗記により精神的な豊かさがもたらされることは変わらない
　　Ⅱ　人生の潤い

ウ　Ⅰ　暗記を得意とする人だけが今後も暗記を続ければよく、苦手な人は情報チップの力を借りるのがよい
　　Ⅱ　暗記の喜び

エ　Ⅰ　暗記という行為は人間の大切な営みの一つなので、技術が進歩してもこれまで通り重視すべきだ
　　Ⅱ　暗記は不可欠

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学五年生の麻衣のクラスでは、担任である松下先生の提案で、東日本大震災から二ヶ月経った被災地へ家庭で余っているカレンダーを送る支援活動を行うことになった。未使用のカレンダーがなかったので、麻衣のお母さんはリビングとキッチンで使用中の物のどちらかを送ることにした。

【Ⅰ】

お父さんに相談すると、「ウチのを送るのかあ」と、思いのほかA渋い顔をされた。

「でも、二つあるうちの一つだし、予定は手帳に書いてるから」とお母さんは言った。

「それはいいんだけど、避難所って、家族を亡くしたひともいるわけだろ？　①そういうひとのところにウチのカレンダーが行くと、ちょっとマズくないか？」

だってほら、とお父さんはリビングのカレンダーを、ぱらぱらとめくっていった。

お母さんにもすぐにわかった。思わず「あっ」と声をあげて、ああ、そうかあ……とBうなだれた。

「台所のほうも同じだろ？　やめたほうがいいよ」

どちらも二ヶ月で一枚のカレンダーだった。ぜんぶで六枚あるうち、すでに二枚が用済みになって、あとは四枚。そのすべてに、マーク付きの日がある。家族の記念日だ。六月にお父さんの四十歳の誕生日、八月には麻衣の十一歳の誕生日、九月は結婚記念日で、同じ九月にはお母さんの三十九歳の誕生日もある。十一月はこの家に引っ越してきた日、十二月は――お父さんが「やめろよ、恥ずかしいから」と止めたのに麻衣が面白がってマークをつけた、お父さんがお母さんにプロポーズをした日。

「説明は書いてなくても、ハートマークとか花丸マークの形だけでも、見るひとによっては嫌な気分になるかもしれないしな」

「でも、麻衣、すごく張り切ってるし、その気持ちは大事にしてあげたいでしょ」

「それはそうなんだけどなあ……」

二人はほとんど同時にため息をつき、タイミングを合わせたように「じゃあ」「だったら」と口を開いて、「消すしかないよね」「消しちゃうか」と言った。

紙質やマークの大きさを比べて、リビングのカレンダーのほうが消しやすいだろう、となった。もちろんどんなに丁寧にやっても、跡は残る。「でも、しかたないよな」「うん、しょうがないよね」と二人で言い訳しながら、修正液でマークを消していった。

【Ⅱ】

年間カレンダーはいくつか集まっていたが、地震と津波の起きた三月十一日の日付をずっと見るのはキツいんじゃないか、ということで送るのを取りやめた。同じ理屈で、まっさらなカレンダーも、四月までのページは切り取ってから送ることになった。いまは五月なので、どちらにしても四月までのカレンダーは用済みのはずなのだし。

海の写真のカレンダーもa自粛した。犬や猫の写真のカレンダーも、ペットと離ればなれになったひとがたくさんいるというニュースをテレビで観た子がいたので、学級会で話し合った結果、送らないことにした。

松下先生は保護者宛（あ）てのプリントで〈万が一にも被災者の方々のお気持ちを傷つけることのないように、と考えました。なにとぞご理解くださいませ〉と書いていた。

保護者の中には「せっかくのb厚意を無にされた」と不満を漏らすひともいないわけではなかったが、麻衣の両親は「それでいいんだよ」「自己満足で相手を傷つけるのって最低だもんね」と先生の判断を支持した。

とにかくc万全を期したのだ。振り返ってみても、どこにも間違っているところはないはずだった。

ところが、カレンダーを送ったあとしばらくたって、窓口になったボランティア団体から松下先生に連絡が来た。

四月までのページを送ってもらえませんか――。

もっと細かく言うなら。

三月十一日以前のカレンダーが欲しいんです――。

松下先生は一学期の終わりの保護者会でその件を報告して、②子どもたちにはなにも伝えていないので、と何度も念を押してから、深々と頭を下げた。

「わたしの配慮が足りなかったんです」

避難所にいるひとたちは三月十一日を振り返りたくないんだ、と決めつけていた。あの日以前の「ごくあたりまえ」だった日々を思いだすと悲しさがつのるだけじゃないか、とも思い込んでいた。

送ったカレンダーには未来の日付しかない。それでいい。悲しみから立ち直って前に進んでいくために、その道しるべとして使ってほしい、と願っていた。

「でも、それ、全然間違っていました……」

先生はひどく落ち込んでいた。申し訳なさそうだった。

保護者会に出席していた麻衣のお母さんは、［X］して、まわりのひとたちと目を見交わした。どこが間違っているのだろう。さっぱりわからない。

ＰＴＡ委員の細野さんが、みんなを代表して「どんなふうに間違ってたんですか？」と言った。「いまお話をうかがってると、先生の考え、正しいと思いましたけど」

先生は、ありがとうございます、と寂しそうに微笑（ほほえ）んで、「でも」と返した。「よーい、どん、で新しい毎日が始まるわけじゃない、って言われました。前だけを向いて走るのって無理なんだ、って……ときどき後ろを振り向きながらじゃないと、もたない、って……」

未来の日付しかないカレンダーを受け取ったひとたちは、東京の小学生たちの厚意に感謝しながらも、みな、複雑な表情を浮かべていたという。それも、三月十一日につらい目に遭（あ）ったひとほど、表情の陰影（いんえい）が濃く、深かった。

「わたしが勝手に、三月十一日以前を『なかった』ことにしちゃったんです。でも、ほんとうは、『あった』んですよね、あたりまえですよね、あの日までみんな、ふつうに、あんなことが起きるなんて夢にも思わずに生きてて、暮らしてたわけで、それを『なかった』ことにしちゃうのって、ひどいですよね、ほんと、ひどいんです……」

先生の声は途中からくぐもって、低く沈んだ。

「四月だって、みんな生きることに必死で、なにがなんだかわからないまま、とにかく必死で生きるしかなくて、だから日付が欲しいのに、自分がいつなにをやっていたのか確かめるための目盛りみたいなのが必要なのに、わたしが勝手に四月を『なかった』ことにしちゃったんです。せっかく皆さんがカレンダーを持って来てくださったのに、ほんとうにすみません、ごめんなさい、申し訳ありませんでした……」

最後のほうは涙交じりの声になってしまった。

③あわてて腰を浮かせてなにか言いかけた細野さんは、結局言葉を出せないまま、ため息をついて椅子にまた座り直した。麻衣のお母さんも、慰めや励ましの言葉を探したが見つからない。それ以前に、お母さん自身、なんともいえない苦い思いに包まれていた。

ほかの出席者も同じだったのだろう、教室はしんと静まりかえってしまった。

【Ⅲ】

会社から帰宅してその話を聞いたお父さんは、「なるほどなあ……」とうなずいた。

「確かに、三月十一日までの生活を否定されちゃうのってつらいかもな。そこは、俺にもちょっとわかる気がする」

「でも、こっちは否定するつもりなんてないわけで、よかれと思ってやったことなんだから」

納得のいかない声で言い返すお母さんを、［Ｙ］、となだめてつづける。

「世の中って、そういうものだって。四月までのページを残して送ると、今度は逆に『せっかく忘れようとしてるのに』って言うひとが出てくるんだよ、どうせ」

「まあね……」

「みんなそれぞれ事情も違うんだし、考えてることも違うんだし、被災した状況だって違うんだよ。それをひとまとめにすることのほうがおかしいんだ。被災地だって、街なかと過疎の村では全然違うよな。それを『被災地』とか『被災者』っていう一言でまとめるのって、やっぱり間違ってるんだよ」

「わたしに言われても知らないわよ」

保護者会のあと、ずっと機嫌が悪い。落ち込んでいるだけでなく、④ざらついた苦いものが、胸にある。

「まあ、だから、全員を一つのことで納得させるのは難しいし、無理なんだよ」

わかる。それはよくわかる。いまさら言われたくないほど、ちゃんとわかっている。だからこそ、カレンダーを受け取ってくれなかったひとや、返しに来たひとや、四月までのページが欲しいと言ったひとたちに対して――ではなく、もやもやとして形も色もはっきりしないなにかに対して、むしょうに腹が立つ。

「なーんかさあ……」

そっぽを向いて、子どものように口をとがらせた。「タダでもらったものに、ケチつけないでほしいよねー」

「おい――」

ぴしゃりと言われ、にらまれた。

「ごめん……いまの嘘、冗談だから」

拗（す）ねた顔や声のまま、謝った。

お父さんは、やれやれ、とため息をついて、「子どもたちには先生のほうからなにか言ったのか？」と訊（き）いた。

「お礼の感想だけ。取り替えてほしいとか、そういうのは、いまは内緒にしておくって」

「そのほうがいいよ。せっかくがんばって送ったんだし」

「もうちょっと時間がたって、六年生になってから……卒業するときとか、とにかくもう少しみんな大きくなってから、必要だと思ったら話したいと思います、って」

保護者会でも、それで話がまとまった。現実の難しさや厳しさを思い知らせるよりも、いまは、困っているひとに手を差し伸べる優しさを持つことを肯定させたい。

「でもね、先生の話を聞いてたら、だんだん不安になってきちゃったのよ」

「なにが？」

「ウチのカレンダー、どんなひとがもらったんだろう。修正液でマークを消してるって、いかにもお古を送りましたってことじゃない？　バカにするなって怒るひともいるかもしれないよね」

お父さんはこわばった顔で、「でもなあ」と返した。

「俺たちだって手間暇かけて消したんだし、それを気に入らないなんて言われたら、麻衣の気持ちまで踏みにじられたよう

なものだから、俺、許さないぞ」

さっきとは立場が逆になった。お父さんもすぐにそれに気づいて、⑤きまり悪そうに笑いながら、「親切っていうのは、ほんとに難しいよなあ」と、しみじみ言った。

（重松清「記念日」による）

問1　波線部a～cの漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問2　二重傍線部A「渋い顔」・B「うなだれた」の語句の本文中の意味として最も適当なものを、次のそれぞれのア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

A 渋い顔
- ア　寂しげな表情
- イ　怒ったような表情
- ウ　悲しげな表情
- エ　気が進まないような表情

B うなだれた
- ア　驚いて顔をそむけた
- イ　がっかりして下を向いた
- ウ　はっとして目を見開いた
- エ　納得してうなずいた

問3　本文中の［X］・［Y］に当てはまる言葉として最も適当なものを、次のそれぞれのア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

X　ア　きょとんと　イ　どきっと　ウ　にやりと　エ　はっと

Y　ア　ふむふむ　イ　やれやれ　ウ　まあまあ　エ　こらこら

問4　傍線部①「『そういうひとのところにウチのカレンダーが行くと、ちょっとマズくないか？』」とあるが、それはなぜか。次の文章の［　i　］・［　ii　］に当てはまる言葉を、【Ⅰ】の本文中からそれぞれ五字程度で抜き出して答えなさい。

［　i　］ひとのところに［　ii　］が書き込まれたカレンダーが送られてしまうと、かえって相手に嫌な思いをさせて傷つけてしまうから。

問5　傍線部②「子どもたちにはなにも伝えていないので、と何度も念を押してから」とあるが、「先生」はなぜこのように念押ししたのか。次の文章の［　i　］に【Ⅲ】の本文中の言葉を二十五字以内で抜き出して埋め、［　ii　］に当てはまるものとして最も適当なものを、後のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

今は子どもたちが［　i　］の大切さを学んでくれればそれでいいと考え、そのために［　ii　］と考えたから。

- ア　カレンダーのその後の件について保護者から意見を聞きたい
- イ　カレンダーのその後の件を保護者から子どもたちに伝えてほしい
- ウ　カレンダーのその後の件を保護者も子どもたちに黙っていてほしい
- エ　カレンダーのその後の件を子どもたちに伝えるかどうかを保護者に任せたい

問6　傍線部③「あわてて腰を浮かせてなにか言いかけた細野さんは、結局言葉を出せないまま、ため息をついて椅子にまた座り直した」とあるが、この時の「細野さん」の説明として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア　東京の小学生の支援の気持ちが被災者たちの心を癒せていない現実に打ちのめされている先生を見て、励ましそうとしたものの、ボランティアとして現地を訪れない限りは支援にならない現実を知らされて衝撃を受けている。
- イ　被災者に対して細かい配慮を重ねていた先生が自分の過ちを認めてひどく落ち込んでいるのを目にし、慰めの言葉をかけようとしたものの、自分もその過ちに気付いていなかったことに思い至り、何も言えなくなっている。
- ウ　いつも思慮深く子どもたちと接している先生につらい記憶を思い出させて泣かせてしまい、急いでその場を取りつくろおうとしたものの、何を言っても先生の後悔を深めてしまうだけだと悟り、あえて無言を貫こうとしている。
- エ　学級会で一生懸命考えてカレンダーを送ったにもかかわらず被災者を傷つけてしまったと後悔する子どもたちと先生がかわいそうで、なんとか元気づけようとしたものの、自分も配慮が足りなかったと気づき、言葉を失っている。

問7　傍線部④「ざらついた苦いものが、胸にある」とあるが、この時の「お母さん」の気持ちを五十字以内で説明しなさい。

問8　傍線部⑤「きまり悪そうに笑いながら、『親切っていうのは、ほんとに難しいよなあ』と、しみじみ言った」とあるが、この時の「お父さん」の説明として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア　妻だけではなく自分も、麻衣が一生懸命に参加した支援活動が否定されたようで納得がいかず、感情的になっていたことに気づき、親として子どもと一緒に支援活動をすることの難しさを噛みしめている。
- イ　妻だけではなく自分も、被災者のために労力を惜しまなかった自分たちの誠実さが否定されたことが悔しく、被災者たちの自分勝手さにいらだっていたことに気づき、冷静に被災者の求めに応じていく支援の難しさを実感している。
- ウ　被災者それぞれの求めに応じた支援を心がけていたつもりが、妻と同じようにいつの間にかお古の余り物を被災地に押しつける支援となっていたことに気づき、被災者の要望をかなえる支援の難しさを噛みしめている。
- エ　親身になって被災者の心情に寄り添っていたつもりが、妻と同じようにいつの間にか支援する側の都合や気持ちを優先した考え方になっていたことに気づき、支援者としての心の持ちようの難しさを実感している。

三　次の【文章Ⅰ】は稲垣栄洋『植物はなぜ動かないのか』、【文章Ⅱ】は、文章Ⅰの続編『雑草はなぜそこに生えているのか』の一部である。それぞれの文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【文章Ⅰ】

①植物は動物に比べて※1可塑性が大きい。それは、どうしてだろうか。

動物は自由に動くことができるので、エサやねぐらを求めて移動することができる。しかし、植物は、動くことができない。そのため、生息する環境を選ぶことができないのだ。その環境が生存や生育に適さないとしても文句を言うこともできないし、逃げることもできない。その環境を受け入れるしかないのだ。

そして、環境が変えられないとすれば、どうすれば良いのだろうか。環境が変えられないのであれば、環境に合わせて、自分自身が変化するしかない。だから、植物は動物に比べて「変化する力」が大きいのである。

植物の中でも雑草は可塑性が大きく、自由自在に変化することができる。この「変化する力」にとって、もっとも重要なことは何だろうか。

それは「変化しないことである」と私は思う。

植物にとって重要なことは、花を咲かせて種子を残すことにある。ここはぶれることはない。種子を生産するという目的は明確だから、目的までの行き方は自由に選ぶことができる。だからこそ雑草は、サイズを変化させたり、ライフサイクルを変化させたり、伸び方も変化させることができるのである。

つまり、生きていく上で「変えてよいもの」と「変えてはいけないもの」がある。

環境は変化していくのであれば、雑草はまた変化し続けなければならない。しかし、変化しなければならないとすれば、それだけ「［　X　］もの」が大切になるのである。

踏まれても踏まれても立ち上がる。

これが、多くの人が雑草に対して抱く［　A　］なイメージだろう。人々は、踏まれても負けずに立ち上がる雑草の生き方に、自らの人生を重ね合わせて、勇気付けられる。

しかし、実際には違う。雑草は踏まれたら立ち上がらない。確かに一度や二度、踏まれたくらいなら、雑草は立ちあがってくるが、何度も踏まれれば、雑草はやがて立ち上がらなくなるのである。

雑草魂というには、あまりにも情けないと思うかも知れないが、そうではない。

そもそも、どうして立ち上がらなければならないのだろうか。

雑草にとって、もっとも重要なことは何だろうか。それは、花を咲かせて種子を残すことにある。そうであるとすれば、踏まれても踏まれても立ち上がるという無駄なことにエネルギーを使うよりも、踏まれながらどうやって種子を残そうかと考える方が、ずっと［　B　］である。だから、雑草は踏まれながらも、最大限のエネルギーを使って、花を咲かせ、確実に種子を残すのである。まさに「変えてはいけないもの」がわかっているのだろう。努力の方向を間違えることはないのだ。

踏まれても踏まれても立ち上がるという根性論よりも、②雑草の生き方はずっとしたたかなのである。

注　※1　可塑性――たやすく変化できる性質。

【文章Ⅱ】

植物にとってもっとも重要なことは何だろう。それは、花を咲かせて種子を残すことである。雑草は、ここがぶれない。どんな環境であっても、花を咲かせて、種子を結ぶのである。

種子を生産するという目的は明確だから、目的までの道すじは自由に選ぶことができる。だからこそ雑草は、サイズを変化させたり、ライフサイクルを変化させたり、伸び方も自由に変化させることができるのである。

これは人生にも※2示唆的である。生きていく上で「変えてよいもの」と「変えてはいけないもの」がある。変えてよいものに※3固執して、無駄なエネルギーを使うよりも、変えてはいけない大切なものを守って行けば良いのだ。

中江丑吉（一八八九―一九四二）という思想家は「人間はそれぞれ守るべき原則をひとつかふたつ持てばそれでいい。他のことはさっさと妥協してしまえ」と言っていたという。「妥協してしまえ」というのは、乱暴にも聞こえるが、裏を返せば［　Y　］ということでもある。

あるいは※4禅の言葉に、「随処に主と作れば、立処皆真なり」という言葉がある。

自分の置かれたどこであっても、自らの真実の姿に巡り合える、という意味である。

大きくても、小さくても、どちらもそれが雑草の姿である。そして、どんな場所であっても、必ず種子を残すのである。変えられない環境に文句を言っても仕方がないのだ。

注　※2　示唆――それとなく気づかせること。

※3　固執――自分の意見などをかたく主張してまげないこと。

※4　禅――仏教の一派。禅宗。

問１　【文章Ⅰ】中の［A］・［B］に当てはまる言葉として最も適当なものを、次のア～オのうちからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　合理的　　イ　画期的　　ウ　具体的　　エ　好意的　　オ　一般的

問２　傍線部①「植物は動物に比べて可塑性が大きい」とあるが、それはなぜか。六十字以内で説明しなさい。

問３　【文章Ⅰ】中の［X］に当てはまる言葉を、【文章Ⅰ】の本文中から五字以内で抜き出して答えなさい。

問４　傍線部②「雑草の生き方はずっとしたたかなのである」とあるが、この表現からうかがえる筆者の考えとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　雑草は踏まれても踏まれても負けずに立ち上がって花を咲かせようと努力しており、困難な環境の中でも決して諦めようとしない雑草の想像以上にしぶとい生き方に驚いている。

イ　雑草は踏まれ続けると立ち上がらなくなるが、それは変えてはいけない目的に最大限エネルギーを使うためであり、努力する方向を見失わない雑草のしっかりした生き方に感心している。

ウ　何度踏まれても立ち上がると思われていた雑草は、実はエネルギーを節約するためにわざと立ち上がらないのであり、努力する過程よりも結果を優先する雑草の生き方を打算的だと批判している。

エ　雑草は何度も何度も踏まれると横たわったまま自らの目的を達成しようとするので、そのような最小の努力で最大の成果を出そうとする雑草の生き方を無駄がなくかしこいと評価している。

問５　【文章Ⅱ】中の［Y］に当てはまる表現として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　守り通せそうにない原則ならば妥協してもよい

イ　社会の一員として守るべき原則は妥協するな

ウ　いくつもの原則を守ることは不可能だ

エ　守るべき原則だけをしっかり守れ

問６　【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】についての説明として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　【文章Ⅰ】では、動けない植物が持つ変化する力や、重要なことを変化させない生き方について説明している。また【文章Ⅱ】では、そのような雑草の生き方はエネルギー効率の良いものだと補足したうえで、植物のように効率的に人生をおくるために役立つ思想家や宗教の考えを示している。

イ　【文章Ⅰ】では、ある面では植物が動物より大きな可能性を持っていることを述べている。また【文章Ⅱ】では、植物は変わらない目的を達成するために自らの力を活用していることを強調しながら、思想家や宗教がそのような雑草の生き方から学んだ教訓を示している。

ウ　【文章Ⅰ】では、植物が大きい可塑性を持つ理由を明らかにしながら雑草のしたたかな生き方について説明している。また【文章Ⅱ】では、変えてはいけないものを大切にする雑草の生き方について再び確認した上で、人間の生き方にもそれに重なる部分があるとして、思想家や宗教の言葉を紹介している。

エ　【文章Ⅰ】では、どんな環境であっても植物が最大限の努力をして生きていることを述べている。また【文章Ⅱ】では、植物は明確な目的を持っているからこそさまざまな工夫や努力ができることに注目し、人間もそのような植物の姿を見習うべきだという思想家や宗教の教えを紹介している。